

郷土への扉

The gateway to local history

ソラシドエアの飛行機を特別塗装した「鹿児島県霧島市・岐阜県海津市姉妹都市交流50周年アニバーサリー1号」が、4月24日から就航しました。今回は、姉妹都市盟約の契機となった治水工事について紹介します。

宝曆治水



鹿児島県霧島市・岐阜県海津市姉妹都市交流50周年アニバーサリー1号

薩摩藩と宝曆治水

治水工事が行われた木曾三川は木曾川、長良川、揖斐川の総称で、岐阜県、愛知県、三重県を流れる大きな川です。かつて、この川の下流は複雑に合流・分流していたため、古くから洪水による大きな被害に悩まされてきました。

特に、宝曆3(1753)年8月に発生した大洪水は、濃尾平野に甚大な被害をもたらしました。事態を重くみた幕府は、同年末に薩摩藩に対して木曾三川の治水工事(御手伝普請)を命じます。翌年1月に薩摩藩の家老・平田正輔(通称、平田鞆負)を総奉行、大目付・伊集院久東(通称、伊集院十蔵)を副奉行とし、藩士たちは鹿児島を出発。翌2月に美濃国に到着しました。



薩摩義士役館跡(岐阜県)の平田鞆負翁像

平田正輔は、財政など薩摩藩の経済政策を担当する勝手方家老でした。琉球使節の引率や江戸での活躍など

が評価され、総奉行に抜擢。幕府関係者や現地の名主、請負町人らとの交渉から資材の調達、経費の管理などの重要な業務を遂行できる優秀な人物でした。

困難を極めた大工事

濃尾平野には大きな河川が網目状に流れており、洪水を防ぐために集落を堤防で囲んだ「輪中」が形成されていました。この地形が原因で大きな洪水が発生していたことから、川を分流して水の流れをよくする堤防を築くことや、破損した堤防の復旧などが治水工事の主な目的でした。

工事現場では幕府の役人による嫌がらせなどがあり、自害して抗議の気持を表した薩摩藩士も多かったと言われ伝えています。夏には赤痢が流行するなど、過酷な労働と粗末な食事で弱っていた多くの藩士が病気になる、亡くなった人もいました。参加した藩士は、追加派遣も含めて約950人。そのうち、80人以上がこの工事の間に亡くなっています。

一度完成した堤防が洪水で壊れるなどのさまざまな困難を克服し、工事は宝曆5(1755)年5月22日に完了しました。費用は当初の予算を大きく超える*40万両ほどとされ、

県指定文化財・鹿児島神宮本殿 屋根改修工事の見学会

- 期日=6月26日(土)・27日(日)
- 時間=①午前9時30分から、②10時30分から、③11時30分から、④午後1時30分から、⑤2時30分から、⑥3時30分から ※受付は各15分前から。
- 対象=小学5年生以上(18歳未満は保護者同伴)
- 定員=各回10人※申し込み多数の場合は抽選。
- 参加料=無料
- 申込方法=市ホームページからか、往復はがきに住所、氏名(2人まで)、電話番号、希望日時(第3希望まで)を記入の上、郵送
- 申込期限=6月18日(金)午後5時必着

問・申=社会教育課 ☎(64)0708

薩摩藩にとつては大きな経済的負担となりました。

総奉行の平田正輔は工事完了後、すぐに藩主宛てに報告を行い、その翌日に亡くなりました。記録上ではかねてから病気であったとされていますが、責任を取って自害したとも伝わります。

この宝曆の治水工事が縁で海津市と霧島市、岐阜県と鹿児島県が友好交流を行ってきました。これからのこのつながりを大切にしていきたいものです。

(文責 坂元)

米1石(150)を1両とし、現在の米5*を2,100円とすると、1両は6万3千円、40万両は250億円超となる。